

弱き者よ、汝の名は……

—女性法史の一断面—

鄭 肯植
翻訳：鄭 榮桓

目次

はじめに

1. 女性の法的地位
2. 文学上の女性像
3. 現実の女性像——結びに代えて

はじめに

我々は韓国の伝統的な女性像を、か弱く清楚な姿として、内では良妻賢母として、外では内助をなし、苦しみを表に出さずに抱え込む「忍従の像」として思い描く。そして生活においては、幼き時は父に、嫁しては夫に、老いては子に従う「三従之道」を体得して生きていると考える。こうした観念は現在の男性中心的社会でより強く美化され、女性の屈従を強要する家父長制社会のイデオロギーとしての役割を果たしてもいる。しかし、これは果たして、我々の歴史像と符合するであろうか？ このような女性像はいつ形成されたのであろうか？ また、何が契機となったのであろうか？ 我々は、既存の事実に対して疑いを持ち、現在我々の脳裏にある女性像について歴史的に検討をする必要があるのではないか。

本稿は、我々の脳裏を支配している伝統的な女性像に対して疑いを持ち、適切な女性像を定立するための試論として、朝鮮時代を中心に女性の法的地位について概観し、文学作品を通して、その社会的反映と変化の過程を検討するものである。

1. 女性の法的地位

伝統社会は男性中心の家父長制社会であると認識されている。前近代社会における家父長権は、時代と地域によって差異があるが、対内的には家族員に対する統一的・排他的・一方的・絶対的な支配権であると同時に、対外的には家族全部の唯

一の代表権であるといえる。内容的には父権・夫権・親権などに分けることができるが、あらゆる権利は家長の一身に属している。伝統社会の家父長権を要約すれば、次のようになる。家長は家族員に対する絶対的支配権を持っており、家族構成員は家長の所有物と認識される。家長は家族の財産を独占的に支配しており、これは家父長制の物的土台を形成する。そして家長は、家系継承者・祭祀承継者として家の永続性を実現する権利と責任を負うのである。

このような男性中心の家父長制社会においては、女性はいかなる権利も持ち得ず、家長、ひいては男性の付属物に過ぎなかった。これを端的に示すのが三従之道である。これは法制としては「女性の行為無能力（女性後見）」として表現される。女性の行為無能力制度は西欧民法で認められ、西欧民法を受容した日本民法と、さらにそれを依用した日帝下の民法でも認定された。解放後、女性の行為無能力は、政府樹立以前の判決において男女平等原則に反するとされ、廃止された。即ち、判決当時、憲法は存在しないが、将来の憲法制定においては民主主義憲法が制定され、憲法には必ず男女平等原則が規定されるはずであるため、女性の行為無能力制度は、男女平等の憲法違反であるとしたのである。

このように女性行為無能力制度は普遍的現象ではなく、ある特殊な歴史的事実に過ぎない。そもそも、我が国では女性の法的地位は強力であったのである。以下、順を追って検討する。

まず、女性にも財産能力・取引行為能力・訴訟能力が認められていた。法律と実例を通して、これに関わる女性の私法上の地位について検討する。

女性が、結婚前に財産を独立的に所有する例は

稀であった。父母が死亡した際に、財産相続を受けるケースと、結婚をして父母と義父母から土地・奴婢等の財産を贈与されるケースがあるが、この場合の財産は受贈者の名義で受け取るため、明確に女性の特有財産となった。

女性は財産相続において男性と差別なく同等に相続し、これは既婚女性も同様であった。諸子女均分相続は『経国大典 刑典 私賤條』に規定され、朝鮮中期まで徹底して守られた。戦後、韓国で法的に男女均分相続が認定されるのは、民法制定後三十余年がたった 1991 年からである。これは、それまでの女性団体をはじめとする多くの団体による家族法改正運動が結実した結果である。ただ、この過程で男女平等の憲法理念と西洋の立法例が参照されたが、我々の男女均分相続の伝統について大きく注目されることはなかった。これは伝統の無視、歴史の忘却である。また、一方で『経国大典』の男女均分相続は法典上の規定に過ぎず、実態はこれと異なり、女性は男性よりも少なく相続するものとされた。しかし、この主張は前述の規定に関する誤解によるものだ。即ち、『経国大典』の相続等についての内容は、現実とは異なる理念型的規定ではなく、紛争を解決する過程で成立したものであって、一般人の法意識・家族意識が反映された慣習法あるいは判例法を成文化したものにはすぎない。仮にこの規定が理念型だとするならば、中国を志向する当時の雰囲気にあつては、中国の相続法に従い、女子は相続から排除され、男子のみの均分相続が規定されたはずだ。また、相続文書である分財記を分析した結果によれば、当時の相続は徹底的で、実質的な均分であった。

相続や贈与された財産は、女性固有の財産として、女性が直接管理した。だが、現実には、女性の社会活動を嫌う内外法などの影響により、使用・収益・管理は父母や夫が行い、女性の主体性は前面には出てこなかった。しかし、財産を処分する際には、女性の主体性が前面に押し出された。土地や奴婢を売買するなどの財産処分の際には、

これに関する文書——買売文記、新文記など——を作成し、売買当事者と証人、文書作成人（筆執）、保人などが直接官庁に行って証明書（立案）を受け取らねばならなかった。同時に、処分財産の所有権の由来を証明する権原文書（旧文記）を併せて買受人に引き渡すことが取引慣行であった。こうした取引慣行と立案は、売買の真実性と所有権の正当性を確認する手続であった。また、これは売買のみならず、財産を相続したり贈与する際も同様であった。こうした取引慣行上、女子所有の財産を処分する際には、女性が取引主体となった。仮に夫といえども、妻の委任を受けずに任意に処分することは、文書を偽造したり代理であると詐称しない限り不可能であった。

名義主体を表現する方法として、現在は署名・捺印を行うが、朝鮮時代には今日のサインに該当する手決が一般的であり、文字がわからない場合は指の節の長さを測り、それを記しておく手寸を用いた。現在のような印鑑を用いる慣例は、日帝が侵略を始めた 1900 年代以降に生まれたものだ。しかし両班夫人の場合は、手決の代わりに印章を用いており、『経国大典 礼典 用印條』には夫の品秩に従った印鑑の規格が規定されている。内容は元来の「某貫某氏印」や、同姓同本同士貸し合う悪弊があったため「某妻某氏印」と記すのが慣例であった。印章の無い夫人は、右手の手掌を押したり、右手を描いて中心に右手掌と記したりした。婦女が取引主体となることを想定して、名義主体を示す方法が考慮されていたのだ。こうした法典の規定から女性が取引主体となっていたことがわかる。また、婦女が取引主体となっている文書も残っている（この時には「財主 母 某氏 [印]」となっている）。

夫婦財産関係は徹底した別産制であった。「巾着の金はかますの金」〔巾着（주머니）は女性の装飾品、かます（잡지）は煙草や銭などを入れる男性の装飾品〕ではなく、「巾着の金は巾着の金、かますの金のかますの金」、つまりは別個の財産であつ

た。ただ現実の取引生活においては、内外法のために女性は積極的な社会生活を行えず、夫が妻を代理して取引をするのみであった。夫婦別産制は死亡した場合も維持され、夫婦の一方が死亡した場合の所有権は相続人である子らにあるが、管理権は生存配偶者にあった。夫婦の遺産は、取得権原によって終局的な帰属を異にした。妻が嫁ぎ先からもらい受けた財産は、妻の財産となるが、夫の死後に彼女が改嫁した場合は、元の嫁ぎ先に返さねばならなかった。また、妻が実家からもらい受けた財産は、妻が子のないまま死んだ場合、養子を迎え無い限りはその実家の血族へと返還された。「血の流れるところに財産は赴く」という血族相続の原則が、法律上保障されていたのである。これについての事例を示したい。

文宗の代に李叔藩とその妻・鄭氏は、共同で一男二女に相続をした。長女は姜順徳に嫁ぐも子が無く、従姪〔従兄弟の息子〕の姜希孟を養子に迎えた。李叔藩と長女が死亡後、姜順徳は義母・鄭氏の財産を甥に贈与した。鄭氏は、自身の財産が血のつながりのない姜氏に渡るのを不服に思い、婿である姜順徳に相続財産の返還を要求した。しかし、姜順徳がこれに従わず、鄭氏は財産の返還を提訴し、朝廷で論争となった。この解決案として次の四つの意見が提示された。1) 生前に夫の意思に従い決定されたことを死後に修正するのは、不従之婦にあたり変更は許されないとする見解と、2) 生存配偶者が夫婦の財産を管理することができるので、妻の変更権を許すべしとする見解、そして、3) 夫婦の財産を区分し、夫の財産については変更は許されないが、妻自身の財産については変更は許されるとする見解があった。4) 折衷案として次の見解が提示され、これが採択された。すなわち、夫の処分と妻の処分を分離し、妻の処分についてのみ変更権を許し、夫の処分についても妻がこれを取消して妻自らが管理するが、妻の死後は夫の処分の効力が再び発生するものとした。また、姜順徳は義母の命令への不服従の罪に問われ

た。

妻や遺妻は財産に対して全権を行使しようとし、またこれを黙認・助長する例も多かった。財産上の女性の地位は、男性に劣らず強力であり、特に子に対してはほとんど絶対的であった。

財産相続のみならず、祭祀相続においても女性は差別されなかった。朝鮮前期には祭祀を嫡長子のみが執り行うのではなく、子女らが順に行っており、これは財産均分相続によって可能となっていた。女性も父母の祭祀を執り行うことができたため、息子がいないからといって必ず養子を迎えなければならぬわけではなく、外孫が祭祀を行った。これが外孫奉祀である。朝鮮中期までは外孫奉祀は非難を受けず、栗谷・李珥も『擊蒙要決』では祭祀輪廻について何ら非難をしなかった。明宗の代から儒学者らが外孫奉祀を非難し始め、両班家では外孫奉祀を控えるようになったが、一般的には依然として残っていた。また、嫡長子相続の慣行が確立した英祖の代にも、門中の反対にも拘わらず外孫奉祀を許容した例がある。19世紀頃からは、代々外孫奉祀してきたことに対して支孫らが財産を狙って提訴、外孫が敗訴するケースが生まれ、外孫奉祀は揺らぎ始めた。

このように朝鮮時代の女性たちは、取引行為における法的制限や、財産・祭祀相続においても、男性に比べて何らの差別を受けていなかった。

戸籍は、国家が国民を把握すると同時に、身分を明らかにする機能を持っている。戸籍の記載例は高麗時代から四祖戸口、八祖戸口の例があるが、四祖戸口は戸主の父・祖父・曾祖父・外祖父と、妻の父・祖父・曾祖父・外祖父を記載するもの(実際には八祖)であり、八祖戸口は四祖の四祖まで記載したものである。八祖戸口は煩瑣だったため、朝鮮時代には四祖戸口に統一された。四祖の記載は、戸主のみならず戸主の妻の四祖まで記載した。こうした戸籍の記載は、夫婦一父母一の祖先を同様の比重で扱うものであり、ここから我々の社会が父系と母系を共に重視したこと、即ち、男女平

等社会であることがわかる。そして、娘のみがいる場合、養子を迎えず外孫奉祀をした点から、娘が戸主承継を行うことができ、また戸主である夫が死亡した場合、子があるのにも拘わらず、現在とは異なり遺妻が戸主を承継した戸口単子の例が残っている。女性は戸籍制度においても現在とは異なり、男性に比して差別を受けていなかったのである。

このような伝統的戸籍制度は、日帝による 1909 年民籍法の制定によって、父系が継承する戸主と家族によって構成される現在の家制度が導入され、変化した。民籍法において、妻は戸主である妻と対等な地位ではなく、戸主の統率を受ける家の構成員である家族へと転落し、実質的には家族の生計をまとめていく存在であっても戸主にはなれなかった。このような点から、現行法が徹底して維持しようとする戸主制度は我々の伝統ではなく、また仮に伝統であったとしても、過去の戸主制度は現在とは全く異なるものであることが分かる。

女性の行動に対する規制は、男女七歳不同席として現れる内外法に代表される。しかし、このような「女性行動に対する規制」は、高麗時代と比べても距離があった。宋の徐兢が描いた『高麗図経』には、男女が共に沐浴し、女性が馬に乗って撃球に興じる姿が記されている。男女の出会いも同様に自由だったのである。このような事実は、高麗歌謡のうち、男女の愛を詠んだ「満殿春」等と、李斎賢が民謡を翻訳した漢詩『済危宝』からも分かる。

氷の上に竹筵敷き／貴方と私と凍り死んだとしても／

氷の上に竹筵敷き／貴方と私と凍り死んだとしても／

情を通じた今宵の夜よ、どうか過ぎないでくれ／

どうか過ぎないでくれ・・・

——『満殿春』

絹を洗う泉のほとり、枝垂れ柳を横にして
浣紗溪上傍垂楊

手を執り心を語らった、白馬の貴方よ！

執手論心白馬郎

軒に連なる三月もの雨があっても

縦有連 三月雨

指先に残ったその香り、どうして洗えようか？

指頭何忍洗餘香

——『済危宝』

朝鮮王朝初期の儒学者らによって、「男女が互いに悦ぶ詞（男女相悦之詞）」として非難され、多くが失われたが、伝承された一部の高麗歌謡の内容がこの程度であることを見れば、朝鮮王朝初期の儒学者の手により失われた高麗歌謡の内容は推測することができるであろう。宋の徐兢は男女関係は「軽く出会い、容易に離れる（男女輕合易離）」ものだとした。このように、高麗時代の女性は、行動の制約を全く受けずに自由な社会生活を行っていたのである。

しかし朝鮮時代になると、女性の行動に対する規制が持続的に行われた。朝鮮王朝初期には、儒教の生活倫理を全社会に普及する努力がなされ、この過程でそれまで女性によって自由に行われていた伝統的な風習が規制されるようになった。そのうち、婦女の歌舞行為、寺に行くこと（上寺）、民間信仰（淫祀）なども問題となった。このような行為は、いくつかの過程を経て『経国大典 刑典 禁制條』に杖百の処罰の対象として規定されるようになった。これは儒教の普及のための抑仏政策であったが、結果的には女性の行動制約、女性の地位低下をもたらした。

また、刑法上、女性は原則として責任を問われなかった。『大明律直解 刑典 断獄編 婦人犯罪條』によれば、婦人は姦通罪（奸罪）と死刑に該当する重大な罪を犯した場合を除いて、本人は捕まえられず、本夫、または本夫がいない場合には、近親が婦人を保護・看守することになった。夫人

は犯罪行為によって直接処罰されるのではなく、家族により保護・看守されることとなり、行為に対する直接の責任を負わなかった。刑法上、婦女は刑罰の主体として認定されず、これは自らの行為に対する自己の責任が無いことを意味するといえ、より行動の自由を制限されたのである。

前代とは異なり朝鮮時代には、男女間の自由な恋愛ではなく、個人の意思よりも家族の意思が優先され、主婚者が婚姻を決定した。主婚者には家族の尊長（父や祖父）になった。個人の意見が入り込む余地は全く無かったのである。また、未婚女性は家族生活において制限を受けたが、『経国大典 礼典 惠恤條』には士族の婦女が齢三十を超えても貧しく、婚姻できなければ国家がそれを助け、仮にそれでも婚姻しなければ家長が処罰された。これは、女性に対する行動の自由を制限するものであり、女性は意思に反した結婚を強要されたのである。

婚姻形態は一夫一婦制が普遍的であった。しかし高麗時代の場合、王室のように一夫多妻制が生じることもあった。これゆえ高麗時代の婚姻形態をめぐり、一夫一婦制であるのか、一夫多妻制であるのか、論争となっている。一部学者は、高麗時代は一夫多妻制であると主張し、とりわけ日本の学者は、婚姻は原始乱婚制→一夫多妻制→一夫一婦制へと発展するという進化論の観点から朝鮮社会の後進性とアイデンティティーについて説明しようとする。しかし、王室の場合は権力と関連した特殊な事例であり、一般的には一夫一婦制が普遍的であった。特に、モンゴル侵入により男子が不足したため、一夫多妻制を主張した大臣が家では妻に頬を打たれ、外では婦女子らから後ろ指を指されたという『高麗史』の記録は、当時の婚姻形態が一夫一妻制であることを示している。しかし後期には、紅巾賊の侵入や倭寇の跋扈などで社会が混乱し、家族が離れ離れになる状況においては、一夫一婦制は分解し、事実上一夫多妻制が存在した可能性もある。しかし、このような現象

は後期の一時的なものに過ぎず、またこれを全体に拡大して一夫多妻制とするのは無理がある。

朝鮮建国後、社会が安定するに従い、一夫一婦制を法的に強制する必要が生じた。まず財産をめぐる嫡子と庶子の争いに対し、嫡庶を区分する必要があったのである。これを解決するため、そして家族内の名分的秩序が強調されるに従い、妻妾を区分することは急務となり、太宗の代から妻妾を明確に区分するようになった。その後、法制的には徹底的な一夫一婦制が確立した。妾が存在し、また公認されているからといって、一夫一婦制であることを否定することはできない。妻と妾の区分は、正式の婚姻儀式を経たかどうかによって決定された。妻妾間には厳然たる身分的・社会的・法的差異が存在していたのである。のみならず、妾の子孫らは公的には官職への進出、私的には相続などの家庭生活において徹底的な差別を受けた。

現在は妻が夫の家〔嫗家〕で暮らすことが一般的であり、またこれは当然のこととして受け入れられている。しかし、このような現象は近来のことである。我が国の伝統的な婚姻居住形態は、嫗家暮らしではなく男性の「妻家暮らし」であった。妻家で婚礼を行った後、相当期間の間、男性は妻家で暮らしをしたのである。為政者らはこれを天地を逆立ちさせたものとして、婚礼を中国式の男性が女性を迎えて男家で婚礼を挙げる「親迎禮」に変えようと努力したが、結局は失敗に終わった。現在の婚礼にもその名残があるが、これによって男女均分相続が可能になり、また、息子と娘が、そして親孫と外孫が平等に待遇を受けるようになったのである。

高麗時代には女性の再婚は自由であり、いかなる傷にもならなかった。甚だしくは王が寡婦と再婚した事例もある。高麗時代には女性の活動において障害は全く無く、男女間の自由な恋愛が行われた時代であった。ただ、三嫁女を姿女案に記録し、子孫の官位への登用を妨げるといった間接的な規制を行った。女性の再婚は、高麗末から制限

され初め、朝鮮時代には婦女の再婚に対する規制が一層強化された。これに従い、太宗の代に再嫁女の子孫に対して官職を制限するという方法で、事実上再嫁を禁止した。これは成宗代の『経国大典』に規定され、全時代を通じて嫡庶差別などの多くの問題を引き起こした。また、婦女の再婚についてはそれ自体の不利益規定を設けた。『経国大典 吏典 外命婦條』には両班夫人は夫の品階に従い、一定の爵号（例えば貞敬夫人、貞夫人、孺人など）を付与されたが、庶孽や再嫁した者はこれに該当せず、もし封爵を受けた後に再嫁すれば追奪された。その反面、男性の再婚については妻喪中の再婚を禁じはしたが、これにも息子の無い場合と老年の例外を置くなど、甚だしい不均衡を露呈した。一方、平民の社会では「寡婦背負い〔略奪婚の一種〕」などの風俗により、事実上の寡婦再婚が許容されていた。

法定離婚事由としては七去之悪（無子、不孝、不貞、妬忌、悪疾、多言、竊盗）があり、また離婚を制限する事由としては、三不去（義父母の三年喪を執り行っている妻、糟糠之妻、実家無き妻）があった。そして法定離婚事由として義絶（義父母に対する殴打、辱説など）があった。義絶事由があれば必ず離婚しなければならなかったが、七去之悪があっても三不去があれば離婚できなかった。即ち、七去之悪は離婚事由にすぎず、義絶を犯したり、不正や悪質の無い限り、事実上離婚は認められなかったのである。伝統社会において女性は男性の一方的な離婚から一定の保護を受けていた。実際、両班家門では婚姻は家門の結合であり、また「天が定めた一对（天定配匹）」という觀念のため、離婚は稀であった。しかし、蓄妾などによる事実上の離婚は存在し、その場合女性は閨房で恨み多き人生を送らねばならなかった。そして平民社会では、今日の合意離婚に該当する事情罷議や割給休書があり、共に暮らせない夫婦は旧情を遠ざけ、自由と愛を求めて自らの人生を送ったのである。

自由婚の禁止、再嫁の制限は前代の状況とは異なるものであり、自由な女性の生活に多くの制約をもたらし、風紀の紊乱を引き起こした。朝鮮王朝初期に数多く発生した姦通は、これをよく物語っており、これは『舍方之』や『於于同』等の映画にも見受けられる。また、孝婦・烈女に対しては国家が大々的な表彰政策（旌表政策）を行って勸奨したが、このような政策自体、国家の意図とは異なり、烈女等がそれほど多く無かったことを逆説的に語っているともいえる。

女性の行為に対する規制の歴史的過程は我々の社会に貞節イデオロギーが普及・形成され、この地の女性を束縛していく過程である。そしてこれは、現在我々の社会に満ちている性に関する二重規範を生み出した歴史的背景なのである。

2. 文学上の女性像

文学は、人口に膾炙され、伝承される過程で一般意識としての女性像を形成していく。本章では、各作品の具体的な分析からその法的な意味を明らかにするよりも、法制度上の女性の地位を念頭に置きつつ、概括的な内容を紹介し、女性の社会的意識と法的地位が社会的にいかなる変貌を遂げたかを間接的に考察したい。

文学の中には、既存の女性像とは異なり、強靱な女性の姿が垣間見える作品がある。まず『沈清伝』においては、無能で自分のために可哀想な一人娘を売り払う沈奉士と、父のために積極的に自らを犠牲にする沈清が対照的だ。沈清は竜宮より還俗して王妃となり、父の目を覚まして家門を再び興す。『沈清伝』においても、孝を実践し家門を隆盛させる強靱な女性の姿を見出せる。

次に、巫歌である『バリテギ姫』（捨て姫の意）を見てみよう。話の筋は次のようなものだ。昔、王の夫婦が暮らしていたが、七人もの娘ばかりが生まれた。最後の娘を懐胎する前、夢に仏陀があらわれ、百日間誠心誠意祈禱をすれば息子が生まれるが、そうでなければまた娘が生まれるだろうと

言った。しかし王は百日間、誠心誠意祈祷することができず、結局娘が生まれてしまい、怒った王は末娘を捨ててしまう。だが、後に王の夫婦が病死すると、捨てられた末の姫があらわれ、あらゆる苦難を乗り越えて靈薬を求め、父母を蘇らせる。そして、その後に末の姫は巫祖となった。『バリテギ姫』の主題は孝であり、バリ姫は巫堂の機能の一つである治病を行ったことにより巫祖となった。バリ姫は孝を実践し、また人間を疾病の苦痛から救った。ここから、父母に孝道を尽くし、人類を救う強靱で「原初的な女性」の姿を見出すことができる。このように、古代の説話と小説から、既存の観念とは異なる積極的で強い女性を見出せるのである。

上の強靱な女性が日常的な女性へと変化する過程は、『オヌイチャンス』〔姉弟力士〕の伝説において見られる。この伝説は、百済の旧地に流布している伝説で、百済復興の失敗と関連があるという。ここでは歴史性は無視して、本稿の主題と関わる点について見てみよう。伝説の基本的な筋は以下のようなものだ。あるところに母と力仕事を生業とする姉弟がいたのだが、姉弟は共に暮らせない運命のため、二人は命をかけた力比べをする。力比べの要素は、時間・労力・距離である。労力の内容については、伝説の発生初期は姉弟いずれも築城であった。そして試合の結果、姉が勝ち息子が死ぬことになると、母が介入して無理やり結果を変え、姉が負けることになる。力比べに負けた姉は死に、自分が卑怯な方法で勝ったことを知った弟も自殺し、一度に全ての子を失った母も自殺するという悲劇的な結末を迎えることになる。だが、後代に至って「内容の合理化」が行われ、女性は力が弱く土木工事をできないため、裁縫と飯炊きなど女性の日常的な仕事をし、男性はソウルに行くという内容に話が変わってしまった。

この伝説は次のことを象徴する。まず、能力の面では男女が同一であり、ときに女性が卓越することもある。では人為的に勝敗が変わってしまう

のはなぜだろうか？力比べの内容である築城は国防を、ソウルは地理上ではなく観念上の政治と権力の中心地、即ち男性の権力志向を意味する。力比べの内容において、女性の役割が国防などの対外的なものから、裁縫などの家庭内のものへと変化したのは、女性の社会的役割と意味の縮小を反映している。男性中心の社会において、男子は卑怯な方法で勝利しても、正当なものと認められる。社会的な活動を制限された女性は、一日で城を築き、命を賭けた試合をする気概があるにも拘わらず、正当な待遇を受けられず無念に死んでいくのである。しかし、家族全員が自殺することで悲劇的な結末を迎えるのは、男性の卑怯な勝利をそのまま容認するほど、社会が男性中心になっていないことを意味する。後代の変異過程を経て、ついに完全な男性中心の社会が到来するのである。これは女性の力比べの内容が、裁縫など家庭的な仕事へと変化することに示されている。そして変異した伝説では、娘が勝ったとしても息子を殺しはしない。これは重男思想の反映である。また、家父長制がより進展した後期の社会においては、勝負自体が何ら意味を持たなくなり、女性が勝つ内容もある。これは歴史性が忘却されたまま、ただ娯楽性のみを帯びて伝承された結果である。

『オヌイチャンス』の伝説は、我々の社会の重男思想を象徴している。即ち、祖上崇拜のため、家系を継ぐために娘よりも息子を重視する思いが、父母——特に夫を失った母——の心の中心を占めることになり、この過程で能力があつて強い娘よりも、それに劣る息子を好むようになるのである。娘は自身が不当にも敗れたことを知りながらも、自ら死を選ぶが、これは父母の愛を受けられない子は生きられないという韓国の家族意識と、家族の悲劇を象徴している。そしてこの伝説の家族構成において特徴的なのは、父無き子はある得ないにも関わらず、母子家庭であるという点である。これは、母系社会の遺風と関連があると思われるが、他方では、父が死んだ場合に家系継承が最も

重要な問題となり、この時女性である母がこれに対する責任を負うという現実を反映しているのではないだろうか。結局、男性中心の家系継承は、女性を一層屈従の道へと追いやったのである。

古代小説には、個人の英雄的人生を描いた英雄小説が多く、神異な出生背景を持つ主人公が家門の没落などによる苦難を負い、修練過程を経た後にそれを克服し、立身出世して、没落した家門を再び繁栄させるという筋のことが多い。18世紀からは『朴氏伝』など、女性が主人公として活躍する女性英雄小説が登場し、20世紀初めまで流行した。女性英雄小説の内容を通して、社会的変化に対応した女性意識の変化を検討してみたい。

既存の議論によれば、女性英雄小説は女性の活躍のあり方に応じて次の四類型に分けられる。第一に、女性が直接活躍せず、男性を助けて間接的に活動するものである。これは女性英雄化の要求が最も微弱なものであり、女性主人公の英雄的活躍像が家庭内でのみ展開され、女性の社会的活動を制約する制度に対し、積極的に対抗しようという水準まで達していない。ただ与えられた状況の中で、女性の活動領域を拡大しようとする消極的なものであり、女性主人公の活動も女性の伝統的女性身分をそのまま維持している。第二に、女性主人公は、日常生活では女性として行動するが、夫などが危機に瀕した際には、これを救うために男装して活躍、危機が解消された後再び女性としての日常生活に戻るというものである。即ち、女性主人公の活動が家庭の外へと拡大しているが、結局は家庭へと戻り、女性主人公の行動も伝統的な女性の身分を大きく抜け出してはいない。女性本来の姿ではなく、一時的に男装をして活動する点からも、女性の社会意識が完全に成長しきれておらず、また女性の社会活動を容認する程、社会的与件の未成熟さを反映していることが分かる。同時に、作家意識も女性主人公を前面に登場させ、男性中心の社会を拒否するほどには成長していなかった。前の二つの類型は、女性主人公が女性の

伝統的身分を維持している点で、女性意識の微弱さを共有している。第三に、女性主人公は家庭の外で活躍し、伝統的女性身分を脱皮して、男性と同等に修学登科して官位を得て、大元帥の職分で戦争に参加し武功をあげるものがある。この類型では女性英雄化の拡大により、女性の男性的機能がより発展した姿を見せるが、男装が必須要素である。また、後半では女性であることが明らかになり、自らの意志に反して伝統的女性身分へと回帰する。この点においては、女性の完全な男性的活動は容認されていない。そして第四の類型としては、前半ではこれまでの類型のように女性主人公の活躍が家庭の外で行われ、修学登科し官位を得るが、後半で女性であることが明らかになって、も伝統的な女性身分へと回帰せずに、職位を維持して、また女性主人公が軍律に背いた男性主人公——主に夫か婚約者——を処罰・訓戒するなど、女性が男性よりも優位に立って男性を支配するものである。

これらの類型は、小説史の観点から見ると順序通りに、そして重疊的に発展しており、社会的活動を制約されている女性意識の発展に対応したものであるといえる。小説において女性主人公が活躍するときには、女性であることを偽って男装する。もちろん男装が活動するのに便利だという側面もあるが、これは女性の活動の限界をも示している。当時の時代状況は、女性の直接的な社会活動を許容しておらず、小説という虚構であっても、女性の身分を保ったまま活躍する女性の姿を見出すことはできない。ただ、女性主人公が女性であることを偽って活躍した後、女性であることが明らかになった際の処理は、女性英雄小説の発展において興味深い様相を呈している。即ち、時代が進展するにあたって、多くの小説が書かれるようになり、女性の職位をそのまま維持する方向へと展開するのである。これは作家意識の発展、ひいては女性全体の意識の発展として把握できるであろう。

女性英雄小説が登場した背景には、壬申倭乱と丙子・丁卯胡乱を経た後、男性中心の社会がもたらした被害に対する反省がある。この両乱は、社会全体に計り知れない被害をもたらしたが、最も大きな被害を受けた集団は女性であった。戦乱の渦中で女性は直接的な生活の苦難を背負い、また侵略による性的な苦痛を強いられた。彼女らは男性の無能力により貞節を失うこととなったが、その責任は自身が負わされ、夫の家からは失節した女として、実家からは家門の名誉を失墜させた子として捨てられ、自ら命を絶つか、あるいは姦淫した女だと後ろ指を指されながら、男性に対する鬱憤を抱きながら生きねばならなかった。胡乱の際に清国へと囚われ、胡乱の後に帰ってきた女性たちは、失節した女とみなされ、夫や自身の実家からも受け入れられなかった。男性らは帰って来た女性たちに対し、家門の名誉のために自ら命を絶つことを強要し、そうでなければ強制的に離婚した。こうした婦女子の処理問題が議論となり、政府では家庭でこれを受け入れ、自殺を強要したり強制的に離婚することを禁止し、これに反した者は処罰された。このような時代状況の中で「還郷女」という言葉が生まれたのである。

前述したように、女性の私法的権利は財産能力、行為能力、訴訟能力が認められるなど強力であったが、それを社会的に展開するには内外法などの制約があまりにも多いという矛盾した社会であった。そして作家たちは、『朴氏伝』のように、無能力な夫である李始白と、道術に優れ父母に孝行を尽くし清の侵略を防ぐ夫人・朴氏のような姿を描いた。女性たちは無能な男性に対する鬱憤と、法上の権利とは異なる現実社会との矛盾を、女性英雄小説を通して噴出したのである。そしてこれにより成長する社会意識を小説を通して反映し、新たな社会の到来を渴望したのである。

女性英雄小説の主題は、奸臣の讒訴などによって父母が無念の死を遂げて没落した家門を、女性主人公が高官となり父母の仇を討つ「孝」と、危

機に瀕した婚約者を女性主人公が救い婚約者と結婚する「貞節」、そして国難に瀕した国家を救う「忠」である。一般的な英雄小説の主題は「忠・孝」だが、女性英雄小説の特性上「貞節」が追加された。忠・孝・貞節は女性英雄小説の表面的な主題であり、これはまさに女性の行動制約をもたらした儒教理念である。女性英雄小説から、儒教理念が社会に波及した程度と、その影響力を推し量ることができるのである。高麗時代はもちろんのこと、朝鮮王朝初期をとっても女性の社会的地位は男性に比して劣悪ではなかった。このような女性の社会的地位が低下し、社会的活動が制限を受けるようになったのは、儒教理念が全社会に波及した後である。女性英雄小説が登場した動機は、女性の社会的活動が制限されていることに対する反省と、男性中心の社会に対する鬱憤であり、これは主題である忠・孝・貞節と相矛盾する。しかし、女性英雄小説にはもう一つの主題がある。これは裏の主題といえ、権力意志・血縁意識・愛情葛藤である。国家に対する忠誠は、女性の権力に対する意志を反映しており、女性は武勇により男性のように国家権力に参与することになる。これは政治への参与を制限された女性が、封建的な家庭生活を脱し、自身の能力と叡智を誇示せんとする意図から来ている。このような権力意志は女性優位の類型では、より鮮明になる。表面的には国家に対する忠誠を強調しながらも、裏では権力に対する意志が示される。女性小説では、孝の実践は『沈清伝』のような自己犠牲であるが、女性英雄小説では自らを犠牲にするのではなく、積極的に父母の仇を討つ。ここに男女の差異は無い。一般に出嫁外人といい、女性は婚姻により家族関係を脱し、父子間の関係においてただ男性だけが認識されるが、女性英雄小説では既存の認識を脱し、女性も強力な血縁関係を意識し、男性と同等に孝を実践する積極的な女性像として登場する。以前の愛情小説では、家庭内で物語が展開し、女性は消極的な忍従の態度を示した。しかし、女性英雄

小説では家庭の外へと展開し、女性も夫や婚約者を救い、復讐のために男装して武勲を立てるなど、能動的で積極的な姿を見せるのである。ここでは貞節の理念を通じて積極的な女性像が描かれた。このような裏の主題は、女性の人間的解放、即ち女権伸長、女性解放、女性能力開発による万民平等の近代社会を志向するものであった。

女性英雄小説の主題は、忠・孝・貞節という儒教理念であったが、裏の主題を通して女性の進取的な姿を描いた。ところが、こうした裏の主題の実現は、当時の社会状況では到底不可能であった。女性英雄小説が生まれた18世紀頃は、儒教理念がより深まりを見せ、あらゆる人生を支配した時期である。そして両乱による身分制の動揺によって両班が数的に増大し、両班自体の内部分化が起きて家門を重視するようになる時期である。朝鮮王朝初期とは異なり、財産相続においても子女均分相続ではなく嫡長子の優遇が始まり、母系は父系に比べて等閑視され始め、外孫奉祀も否定的に評価されることにより家系継承のための養子が普遍化していった。これと共に社会全般で家父長制の色彩が強まり、現実社会での女性の地位は法典とは異なり低下した。こうした時代状況では、女権の伸長は不可能であった。この点で女性英雄小説の裏の主題である女性解放は夢、即ち白日夢であったと言わざるを得ない。現実には実現できないことを、夢として表出したのであり、これは女性の内面意志を発現したものなのである。

3. 現実の女性像——結びに代えて

我々はこれまで、朝鮮時代の女性の法的地位が強力に保障されていたことと、法典上の強力な法的地位の現実への反映の様子を文学を通して検討した。最後に、封建的桎梏を脱し、力動的に生きた歴史上の女性の姿を形象化した漢詩を紹介して、本稿の結びとしたい。

訥隱・李光庭（1674－1756）は退溪学風の影響を受け、代々奉化郡に暮らしながら弟子を育てて

いた。彼はまた、慶尚道地方で実際に起こった事実を見聞し、創作活動を行った。

彼は『江上女子歌』で、奴婢を追跡して商人に殺された父の仇を討つ女性を詠った。末尾で作家はこれを称賛し、十人の息子よりも秀でた娘一人がより良いとし、進取的な思考を示した。『香娘伝』は慶北善山地方で肅宗28（1702）年に実際に起きた事件を元に作られた。香娘は結婚前には継母にいじめられ、結婚後には夫に捨てられて、周囲による再婚のすすめを拒み、貞節を守るために結局自決したのだが、この事実を知った朝廷は彼女のために旌閭門を立てた。この詩の主題は貞節であるが「二夫にまみえない（不更二夫）」儒教の封建倫理が庶民女性の人生をいかに縛り付けたかがよく示されており、結局香娘は自らの選択により自決する可憐な女性の姿を示している。

『昔、蘇不韋がいた（昔有蘇不韋行）』は四十行三千字（ハングルでは九千字）の長編叙事漢詩であるが、これは肅宗36（1709）年に慶尚道星州で起きた殺人事件を形象化したものである。事件の概要は次の通りである。県監朴キョンヨが、没落両班朴スハの先山で隠れて偷葬したことに対し、朴スハは監事にこれを提訴したが敗訴し、その上棍杖で打たれて死亡した。死ぬ間際、彼は娘に復讐を託す遺言を残した。娘のヒョランは復讐のために朴キョンヨの山の墓所を破壊し、朴キョンヨを誘い出すが、彼は恐れて奴婢300人を送ってくる。ヒョランはこれと戦うが復讐を願いつつ死亡し、これを知った住民らは憤激して奴婢を追い返した。妹のジュンランはこの事実をソウルに訴え、朝廷は按察使と暗行御史を派遣するが、朴キョンヨの謀略によって成すすべも無かった。また、ヒョラン姉妹の行動に感激した儒生らも決起したが、結果は同様であった。この事件は結局解決されないまま、記憶の中に埋もれてしまい、その後嶺南地方では天変地異が発生したという物語である。

この詩の主題は父の復讐をする「孝」であるが、一方では権力の不道德性とこれに強く抗議する強

靱な女性の姿が描かれている。作家自身も罪を犯した者が罰を受けない現実を慨嘆しており、これを志操あるソンビ(学者)と天も共感しているとする事で、叙事詩を結んだのである。

上記の漢詩に表れた女性の姿は、強靱で男性を超える能力を持つ女性が、虚構としての小説の中ではなく、現実生きていたことを雄弁に語っている。特に最後のヒョランとジュンランの行動は、単純な個人的「孝」の実践ではなく、女性が社会的に自覚し、不当な権力の横暴に抗議する積極性を表現しており、これは歴史の発展に肯定的な役割を果たしたのである。

参考文献

朴秉濠『韓国法制史攷』、法文社、1974年。

『韓国法制史』、韓国放送通信大学出版部、1986年。

『韓国の伝統社会と法』、ソウル大学校出版部、1986年。

「韓国家父長法制の史的考察」、『韓国女性学』第二集（韓国女性学会）、1986年。

金用叔『韓国女俗史』、民音社、1989年。

崔來沃『韓国口碑伝説の研究』、一潮閣、1981年。

張徳順他『口碑文学概説』、一潮閣、1971年。

チョン・ヨンムン「女性英雄小説の系統的研究」、忠南大学校文学博士学位論文、1988年。

余世柱「女将軍登場の古小説研究」、嶺南大学校文学碩士学位論文、1981年。

金血祚「漢詩を通して見る李朝女性の形象——訥隱李光庭の叙事的漢詩を通じて」

『民族文化論叢』第九集（嶺南大）、1988年。

裴慶淑『韓国女性私法史』、仁荷大学校出版部、1989年。

（ちょん ぐんしく・ソウル大学）